「日々の理科」（第 3602 号）　2024,-6,17

「石垣島離島紀行（23）」※２ページ

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所
田中　千尋　Chihiro Tanaka

【３日目／５月２４日（つづき）】

与那国島の南海岸線に沿って、「奇岩めぐり」をしながら、一番東の「東崎（あがりざき）」を目指しました。岬の手前では再度「テキサスゲート」を越えます。東岬の周辺にも与那国馬や牛がたくさんいるからです。テキサスゲートは相当にゆっくり通過する必要があります。

ほどなく「東崎」に着きました。「日本最西端の島」の「最東端の岬」です。断崖の上に広がる草原の果ての灯台という感じで、北海道網走の「能取岬灯台」を思い出しました。

このあたりには牛や馬の糞がたくさん落ちています。キノコが発生していました。これは「トフンタケ」（兎糞茸）*Deconica coprophila* というキノコで、動物の糞にだけ発生する菌類の子実体です。幻覚性の中毒を起こす毒キノコで、いわゆる「マジック・マッシュルーム」の一種です。馬や牛の糞に発生するキノコには幻覚性の中毒を起こす毒茸が多いので注意です。

毒キノコは嫌いですが、キノコそのものは好きなので、岬の風景をバックに１枚撮影しておきました。

次に向かったのが「与那国島アヤミハビル館」です。与那国島の内陸の山の麓にあって、案内表示があまりなく、場所がわかりにくかったのですが、何とかたどり着きました。「アヤミハビル」というのは、与那国の方言で「ヨナグニサン」のことです。

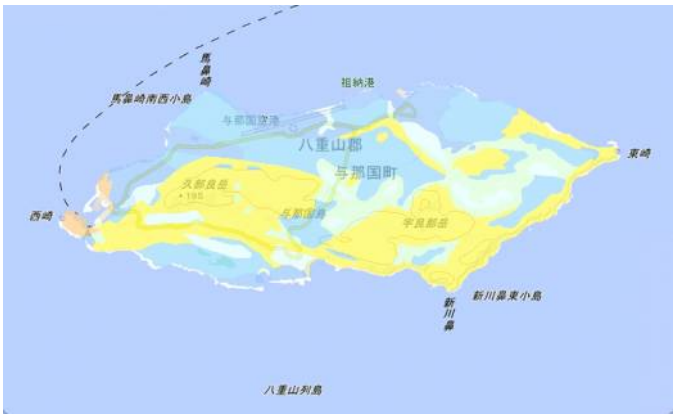
ヨナグニサン *Attacus atlas ryukyuensis* は、与那国島特産の蛾で、わが国では最大、世界でもヘラクレスサンに次いで２番目という巨大蛾です。種（しゅ）としての *Attacus atlas*（アッタクス　アトゥラス）はインド、東南アジア、中国など広く分布していますが、亜種の *A.a.ryukyuensis*（リュウキュウエンシス）は与那国島とわずかに西表島、石垣島にしかいません。「アヤミハビル館」は、この蛾専門の博物館なのです。

残念ながら私が訪問した時期は生きた成虫の飼育はなく、標本だけ見せてもらえました。しかし標本とは言え、初めて見たヨナグニサンの巨大さと美しさに圧倒されました。

ちょうどさなぎになるところという様子も見られました。大きな木の葉を自分で丸めて、その間に蛹室（ようしつ）を造り、さなぎになるのだそうです。

生きた幼虫も見せてもらえました。とにかく巨大で、こんなのが肩にのっかってきたら、たぶん気絶すると思います。脱皮をしたあとに、体が白い粉のようなもので覆われるのだそうです。その後「ヨナグニサンの一生」という映画も見せてもらい、大変勉強になりました。行ってよかったです。

与那国島に流れ着いた「福徳岡ノ場海底火山の軽石」も展示されていました。「硫黄島の黒い軽石」もたくさん流れ着いているのですが、まだ展示されていませんでした。



（産総研地質図）

上図は、与那国島の地質図です。全体的に島の北半分は新生代第四紀の石灰岩、島の南半分は新生代第三起の堆積岩（主に砂岩・泥岩の互層）とわかります。八重山列島の他の離島海岸に多い「砂質堆積層（砂浜）」が全くありません。事実、与那国島に砂浜はほとんど存在しないのです。

島の北側には、小さな砂浜はいつくかあります。これは祖納（そない）集落に近い狭い砂浜です。その名も「四畳半ビーチ」。ほかにも「六畳ビーチ」「三畳ビーチ」なんてのもあります。

最後に祖納集落にある「与那国郵便局」に寄りました。いろいろな消印で記念押印をしてもらいました。